

国指定
名勝

中山仙境 (夷谷)

豊後高田市教育委員会

瀬戸内海 (周防灘)

至高田

祇舎不動

213

香々地

佐古

楽庭神社

長小野

前田

653

靈仙寺

登り口

無明橋

兄弟割石

線彫板碑

至真玉大岩屋

西夷

梅ノ木磨崖仏

いにしへの靈山は二筋の谷の情景をつなぐ—

名勝 中山仙境 (夷谷)



中山仙境

夷谷を分かつように聳える中山仙境。天を劈く岩峰群は長らく畏怖の対象でした。しかし、千年の時を経て中山仙境は、東西の夷谷の文化をつなぐ源流となり、時には美しい四季の歌枕として、時には人々を匿う隠れ山として、多くの人に愛されるようになりました。

中山仙境の峯道へ

たかじょう 高城

中山仙境の峯道で最も高い「高城」。ここからの景色は名勝・中山仙境(夷谷)を理解する上で重要な視点場となっています。二筋の夷谷が中山仙境の起点で合流し、香々地谷^{かかち}となって瀬戸内海に注ぐ地形が一望でき、標高317mの低山とは思えないパノラマが楽しめます。



むみょうばし 無明橋

中山仙境の無明橋は、2本の細い石材を並べただけのバランスで架かっている「挿み合わせ」の石橋です。橋の太さは50cmほどしかなく、渡るには勇気が必要です（すぐそばに無明橋を渡らずに進める迂回路があります）。

誰が架けたかなど分かっていませんが、実は橋の裏側には薬師三尊（薬師如来・日光菩薩・月光菩薩）の梵字が彫り込まれており、仏様のお力を借りて、橋が落ちないようにまじないがしてあります。



石仏たち

中山仙境には30ヶ所ほどの霊場があり、石仏があらゆる場所に置かれています。これは江戸時代後期にできた四国八十八箇所の写し霊場で、弘法大師と各寺院のご本尊が祀られているものです。少し前まで「おせったい」と呼ばれるお祭りが、岩山の上の平場で行われていた場所も少なくありません。

本筋から少し外れた場所にも石仏はありますが、景色が良い場所も多くありますので、少し寄り道してみてもいかがでしょうか？

注意：中山仙境には、滑落の危険がある箇所が多くあります。安全に配慮し、適切な装備と心構えて登山を楽しんでください。



馬の背

まっすぐ背骨が突き出た「馬の背」に例えられる細い尾根道を進む修行場。常に視界は開けており、谷を見下ろしながら、狭い足場を渡ることになります。ゆっくりと変化する景色を見ながら空中散歩をしているような感覚がします。

馬の背を過ぎると下りの行程に入りますが、徐々に傾斜が増えてきて鎖場も多く、足場が狭い場所が続くため、細心の注意を払いながら進みましょう。



隠れ洞穴

岩山に伝う細道を鎖につかまりながら降りていくと、ひととき白い岩山の麓に出ます。そこには少し深い洞穴ができており、戦国時代に黒田官兵衛に暗殺された宇都宮鎮房しげふさの残党達が籠っていたという伝説「隠山軍談かづま」があります。七人の残党達に共通する苗字は「〇〇丸」。今も多くが旧香々地町で見られる苗字です。黒田軍の追手を退けた残党達は、夷谷や赤根谷に散り散りになったと伝えられています。



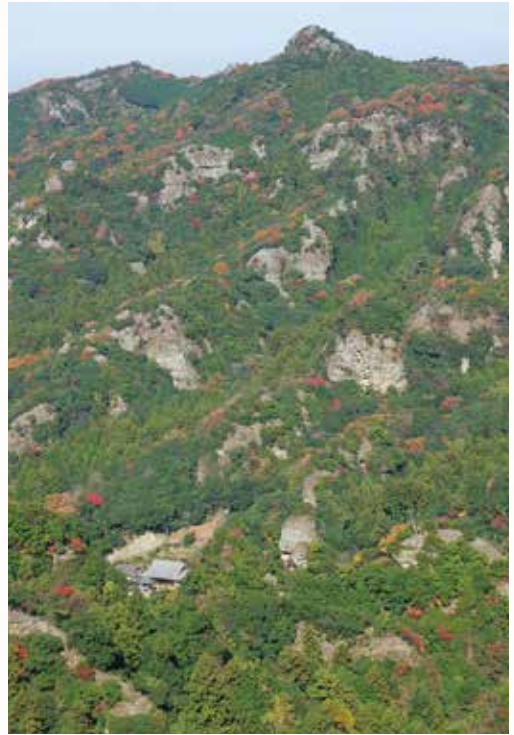
魔物が棲んだ岩峰を拓いた僧侶達

大魔所と呼ばれた岩林に挑んだ僧侶達

夷谷を囲むように展開している岩峰群は、国東半島で最も規模が大きく、しばしば岩林などの言葉が使われます。両子山の噴火によって生じた安山岩質の凝灰角礫岩は、長年風雨に晒されることで、密度のムラによる不規則な地形を生み出します。夷谷では50～80メートルほど垂直に聳える岩峰を形成し、中でも中山仙境では一筋に連なった尾根筋が、ノコギリの刃のように細かく上下しています。

この岩峰の荒々しさに人々は恐怖を抱き、悪魔・魔物が棲む場所「大魔所」と形容しました。平安時代に夷谷に住んだ僧・行源が記した「夷住僧行源解状案（『余瀨文書』）」を見てみると、平安時代以前の夷谷は大きな岩や巨木の根が谷全体を覆い、人が足を踏み入れる場所ではなかったようです。

厳しい修行を自己に課すために夷谷に住んだ僧侶達は、夷石屋という寺院を形成し、仏事に勤しむ傍らで谷の開拓を試みました。平安時代から鎌倉時代にかけて、僧侶達は邪魔な岩などを掘り返し、少しずつ夷谷を人々が暮らせる里にしていっていったのです。



岩峰が競い立つ夷谷

余瀨文書とは？

夷地区に隣接する長小野地区にあった余瀨家に伝来した国東半島最古の古文書群。平安時代の六郷満山初期の様子を伝える古文書は大変貴重です。

長承4年（1135年）の「夷住僧行源解状案」は、僧・行源が自ら開発した耆闍谷（現・祇舎谷）を領有してよいか、六郷満山の有力僧侶（満山大衆）の御判によって承認されようとしたものです。



夷住僧行源解状案

右拡大部に「大魔所」と見える
（写真：大分県立歴史博物館提供）



夷石屋の修行場の跡

夷谷に住んだ僧侶達が開いた寺院「夷石屋」の寺域は、夷谷全域から長小野地区に及びました。かつて僧侶達が住んだ「〇〇坊」「〇〇屋敷」に由来する地名や（住蓮坊→現・十連、善華坊→現・前花など）、僧侶達が切り開いた水田を示す「〇〇払」が残されています（東南払、庵十払など）。こうした地名の分析により、夷谷の開発がどのように進んだかある程度知ることができます。

夷石屋の初期の遺跡は東夷の北西側に形成されました。東夷の岩峰の間には幾筋もの細谷が伸びており、僅かな土地ながら開発が可能でした。多くの修行場を抱えた夷石屋は、修行の寺である中山寺院の1ヶ寺として名を馳せますが、ある時期には民衆に加持を施す布教の寺である末山寺院の1ヶ寺として名を連ねることもありました。

平安時代に僧・行源が開発した耆闍谷の最奥部には、祇舎不動と呼ばれる小堂が残されています。それほど古い仏像などが残されている訳ではありませんが、夷石屋で記録に残る最古の修行場です。

また、坊中岩屋は国東半島でも最古級の宝塔が並べられる岩屋です。小字・十連に位置し、住蓮坊の故地と推定されています。スリムで細長い宝塔は、平安～鎌倉時代の宝塔の様式を踏襲しているとされ、夷谷でも最も古い石造物として知られています。



祇舎不動



坊中岩屋 宝塔

六郷満山とは？

国東半島の6つの郷（来縄郷・田染郷・伊美郷・国東郷・武蔵郷・安岐郷）に、最大65ヶ寺も開かれた寺院群のこと。本山（学問の寺）、中山（修行の寺）、末山（布教の寺）に分類され、古代～中世には巨大な組織を形成して1つの寺院として活動していました。

中世以前の各寺院は「〇〇山」「〇〇岩屋」と呼ばれ、険しい自然の中での「行」を重視しました。中でも、10日ほどかけて国東半島の岩峰をめぐる修行する「峯入り」は、わが国最古の回峰行の1つとされています。



江戸時代の峯入りのルート

聖なる「仙境」を仰いだ先人の足跡

六郷山夷岩屋の寺社境内

夷谷の全域に拡大した夷石屋の中でも、寺院としての中心的な機能を持つようになるのは、現在の「**霊仙寺**」「**実相院**」「**六所神社**」が並んでいるエリアです。3つの寺社が横に並んで境内を形成する風景からは、国東半島の神仏習合文化を感じることができます。

霊仙寺

朱塗りの鐘楼門が地域のシンボルにもなっている**霊仙寺**は、中世の夷石屋の中心・こんぼんいん根本院であったとされています。年に一度の御開帳の日にはしか見られない御本尊・千手観音は、鎌倉時代の六郷満山寺院を列挙した「安貞目録」において、夷石屋の御本尊とされているものです。

ほかにも境内にはいくつもの石造物が展開しており、中世から近代にかけて地域から信仰を集めていたことが分かります。

(⇒名勝での見所 p10 霊仙晩鐘・板井派仏師)



霊仙寺

実相院

霊仙寺と同じく夷石屋の中心的な坊の1つが寺院化したものです。霊仙寺と共通する「夷山」という山号を使用しています。境内に建つ豊後高田市最大の国東塔（389cm）は、近代に入って六所神社から移動してきたものです。

本尊は六郷満山で最も信仰をあつめた尊像の1つである不動明王です。寺院後背には小規模な墓地があり、板碑1基は南北朝時代のものとされています。



実相院（右は国東塔）

六所神社

現在は神社となっていますが、かつては夷石屋の境内の中心的な区画であったと推定されています。中でも現・本殿がある場所を見てみると、大きな礎石が並んでいますが、これは夷石屋の講堂の跡であるとされています。後ろの岩室を見てみると、屋根の跡と思われる溝なども残されており、かなり大きな建物が建っていたと推定されます。

また、六所神社の境内には、旧境内社とされる今夷社や、僧形の磨崖像など、国東半島らしい文化財が多数残されています。

(⇒名勝での見所 p10 六所宮燈)



六所神社（右は磨崖像）

聖なる山 中山仙境

平安時代には大魔所と畏怖され、東西の夷谷を分断していた岩峰群も、時代が進むと夷石屋の修行場に組み込まれるようになってきます。尾根道を進む修行「峯入り」の舞台にもなったと考えられますし、修行僧が行き交ううちにそれを見上げる人々によって、岩峰は仙人の住む聖なる山「仙境」へとイメージを変化させていきました。

南北朝時代以降、今まで東夷の北西側に展開してきた霊場・修行場は、打って変わって中山仙境側に作られるようになります。

霊仙寺旧墓地

六所神社から川を挟んで対面辺り、兄弟割石の裏手に広がる墓地は、中世から近世前期に展開した霊仙寺の墓地です。六郷満山の中でも大規模な墓地の1つで、200基ほどの墓塔（五輪塔や板碑など）が並んでいます。最深部の中山仙境の岩峰にぶつかる辺りが最も古いとされています。岩壁に磨崖連碑と呼ばれる墓碑や、磨崖五輪塔が多数彫り込められています。薄石を敷き詰めた地域性のある野面積みの石垣をつくり、平場を確保しています。



霊仙寺旧墓地（磨崖連碑・磨崖五輪塔）

道園・線彫板碑

中山仙境の登山口から西夷の方に少し入った所の人家に、線彫板碑へと繋がる細道があります。南北朝時代から近世初頭にかけての墓地であると推定され、中山仙境側を向いている初期の仏教遺跡です。巨岩を彫り込んで線刻の連碑を作る珍しいつくりで、県指定史跡となっています。



道園線彫板碑（左奥の大きな岩）

梅ノ木磨崖仏

西夷の谷の中程にある字・梅ノ木にある磨崖仏で、中山仙境の岩壁を使って磨崖仏4躯と、磨崖五輪塔19基、線彫連碑をつくっています。

磨崖仏は中央に高さ約70cmの地藏菩薩と、比丘・比丘尼像を彫ったものであり、比丘・比丘尼像は願主であると考えられます。周辺の磨崖五輪塔も下部に奉納孔が穿たれ、墓塔の役割を果たしていたと考えられます。南北朝時代から室町時代にかけての遺跡で、県指定史跡となっています。



梅ノ木磨崖仏（左が地藏菩薩、右が比丘・比丘尼像）

夷谷八景 —200年前の和歌の世界へ—

高井八穂が選んだ 200 年前の歌枕

文政2年（1819年）、国学者・高井八穂が、板井某の求めにより「夷谷八景」を定めたことが分かっています。この年は頼山陽が耶馬溪を「耶馬溪山天下無」と賞した翌年で、豊の国の岩峰の景色の再評価が最も進んだ時期と言えます。

夷谷八景は、高井八穂が呼んだ和歌とともに、現代に伝わっています。一部分しか見られなくなってしまった景もありますが、約200年前の八景がすべて特定される例は全国でも稀です。

高井八穂とは？

江戸の歌人・日野資枝に指示した歌人・高井宣風（1743-1832）の子で、国学を志して本居宣長に師事し、「古今和歌集」などの古典和歌の分析を行った第一人者でした。加藤千蔭・村田春海とも親交が深く、江戸化政期の歌学界を牽引した1人とされています。

楽庭櫻花

祝子が立ち舞う庭の櫻花
いくよの春のかざしなるらむ

楽庭神社に咲く桜のことです。現在は桜の咲く頃に、麦の豊作を祈る神楽が舞われます。



藤谷藤花

角ぬさはふ岩根を越えて名ぐはしく
花咲かるる谷の藤波

藤ヶ谷は鎌倉時代の古文書に登場する地名。昔から藤の名所であったと考えられます。



夷川螢火

夷川すだく螢のかげを見て
またしらぬ火とおもいけるかな

霊仙寺の前を流れる竹田川。その畔には螢が群れる名所になっています。



高城秋月

さやかなる光りや代々にまじらなく
高城の山の秋の夜の月

中山仙境の「高城」に月がかかる様子。現在も夷では観月祭が開かれます。



このページの時代

1000年前



現代

約200年前
江戸時代

おおひらほうせつ 大平峯雪

ふりつもる雪にうもれて岩角も
平らに見ゆる峯のかよい路

大平山は前田から見た小牟礼山のこと。前田富士と呼ばれています。



くるまばしやう 車橋夜雨

橋の名にかけつゝ夜半の雨音を
しのび車の寄るかとおもふ

中山仙境の登山口付近にあった平治橋（車橋）。今は親柱だけが残されています。



れいざんぼんしょう 霊仙晩鐘

世の中のほかの住家にいかばかり
よし婆蘇山の入相の鐘

吉婆蘇山は霊仙寺の古い山号。霊仙寺の夕方の鐘はいつこの時代も響き渡ります。



ろくしょくとう 六所宮燈

やはらくる光をよに見するかな
六つの宮居の夜半のともし火

六所神社でひととき大きな燈籠（常夜燈）は、高井八穂が来る直前にできたもの。



板井派仏師の活躍

板井派仏師の作品

板井姓の人物の家職として有名なのは仏師です。板井甚蔵国光をはじめ、板井姓の人物は代々比叡山から法橋（職人などにも与えられた僧綱の1つ）を名乗ることを認められ、豊後高田市の広い範囲に優れた作品を残しています。

夷谷で良く知られているのは、猿田彦大神像庚申塔 [板井半蔵①]、高さ 634cm で九州最大の一石の像である一石地藏尊 [板井国良②]、戦国時代の鬼会面を模刻した霊仙寺鬼会面 [板井国光③]、戎子橋 [板井春哉④] などです。



夷谷の伝承 —隠れ里の風景—

中山仙境(夷谷)は多くの伝承に彩られています。岩に関連した伝承や、偉人が棲んでいたという伝承など、中山仙境の風景から湧き出て夷谷に根付いた様々なイメージ(岩山の恐ろしい景色や隠れ里的な雰囲気)を反映しているものが多くあります。

兄弟割石

東夷の六所神社の前と、西夷横岳の水田跡の中には、それぞれ兄弟割石と呼ばれる巨岩があります。割石と言うだけあって、岩の中心に大きな割れ目があり、中に入ると中山仙境の地下で繋がっているという伝承があります。また、繋がってはいるものの、出ようとした方の割石の割れ目が狭まって、中に入った者は2度と出られないとされています。

地元には「西の割石が雉を食べば東の割石は人を食い、東の割石が雉を食べば西の割石は人を食う」という言い伝えがあります。



兄弟割石 (東夷)



兄弟割石 (西夷)

鬼ヶ城の伝説

鎌倉時代の豊後刀の名匠として知られるきのしんだ ゆうゆきひら紀新大夫行平。実は夷谷の出身とも、終の棲家を夷谷に求めたともされています。夷谷は中世には「きりかね」という鉄を産出していました。

行平は、刀身に仏像などの彫刻を施した作品を鍛えた最初期の人物とされ、京都御番鍛冶の十人に九州では唯一選ばれました。いしご石河内溜池の奥にある鬼ヶ城は、刀を打つ様きのしんだ ゆうが鬼神大夫とも称された行平の金床であると伝えられています。

六本杉

東夷・六所神社の石段の前方右側に六本並ぶ神木を「六本杉」と呼んでいます。数百年の樹齢があった先代の六本杉は樹勢が衰えて切り倒されてしまいましたが、足利尊氏が植えたという伝承が残っていました。

南北朝の動乱に一度敗れて、一時九州に身を寄せた尊氏は、六所神社で戦勝祈願のために六本杉を植えたとされています。その後、尊氏は宇佐・博多へ進軍し、歴史の表舞台へと再び戻っていきました。



行平の刀
(写真は大分県立歴史博物館提供)



六本杉

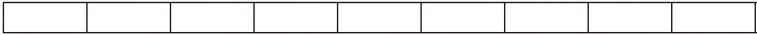
吉田光由の稽古庵

わが国最初の数学の教本とされる『じんごうき塵劫記』を編纂したみつよし吉田光由が、晩年に夷谷の風景を気に入って、前田地区に塾を構えていたとされています。その後、光由は京都に帰ったとされていますが、光由の墓と伝えられる墓所が夷・台林に残されています。

光由を迎えた西夷の隈井家などには『塵劫記』の古い写本が伝来しています。現在、隈井家に伝来した本は位牌とともに豊後高田市が保管しています。



西夷に今も伝来する『塵劫記』の写本



行楽の山として

江戸時代に霊仙寺の僧侶たちによって、長小野地区から中山仙境にかけて地域を一周するように、四国八十八箇所霊場が写され、中山仙境も庶民の霊場巡りの山に生まれ変わりました。

それから春になると中山仙境の左右にそれた岩場で、集落を見下ろしながら「おせたい」が開かれるようになりました。

そして、昭和中期頃になると中山仙境は行楽の山としての整備がはじまります。旧香々地町の観光スポット筆頭として、岩山登りで美しい景色を眺めたり、岩峰に涼を求めたりして、多くの人々が中山仙境や夷谷を訪れるようになりました。

現在では約2時間でスリリングな峯道が楽しめる登山スポットとして人気を集め、国東半島を一周するロングトレイルの目玉の1つにもなっています。



尾根歩きのスリルを味わう人達

一路一景公園からの岩の名前

中山仙境（夷谷）の岩峰が並び立つ様子を手軽に楽しめる視点場が一路一景公園です。ここから見える岩には、それぞれ「窓岩」「大仏岩」「白岩」「烏帽子岩」「七福岩」「不動岩」「くじら岩」「高岩」と名前が付けられており、地域の人から愛着を持って見上げられていることが分かります。



夷谷の四季



春

淡紅色の山桜や楽庭の桜（3月）、岩から枝垂れる山藤（4月）、新緑の季節には仙境春祭りが開かれます（5月）。



春

秋



秋

秋は紅葉が綺麗です。マルバオダモ（赤）、イワシデ（黄）などが、常緑樹の植物群と混ざり合い、夷谷の峰々は3色で彩られます（11月）

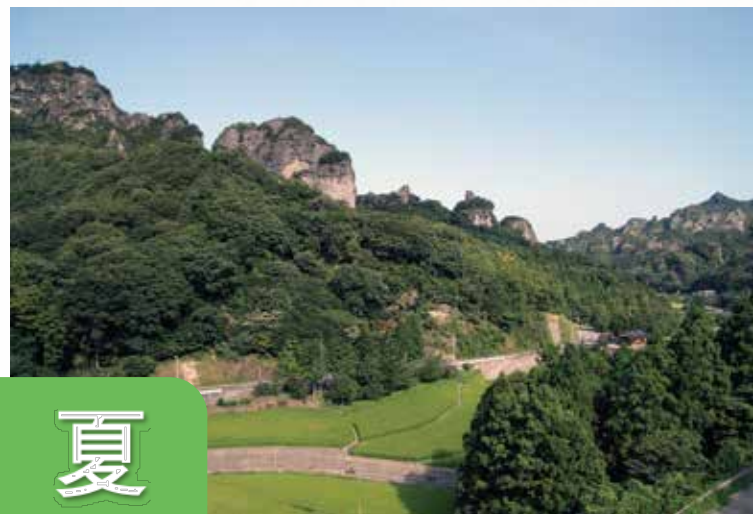
夏

田んぼに水を張る頃には
螢が見られます（6月）。
田んぼも青々しくなった
夏の風景も美しいです
（8月頃）



夏

冬



冬

雪の降り積もる中山仙境は、鬼や悪魔
が出そうな大魔所の迫力があります
（1月）。霊仙寺の御開帳があるのも冬
の頃です（2月）。



